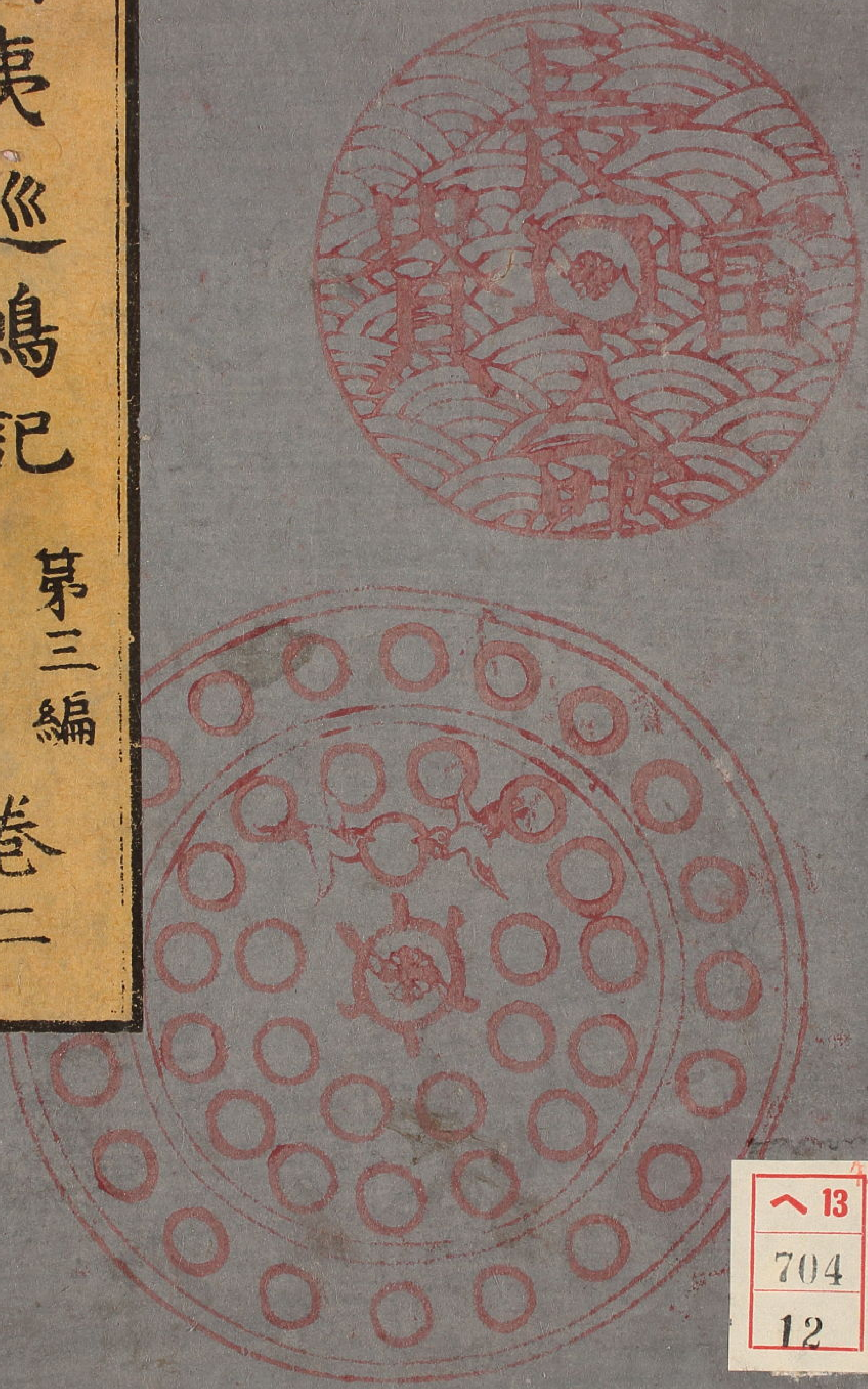
朝夷巡嶋記

苐三編

巻二



へ 13
704
12

門 號 704 巻 12

明治三十六年十月九日購求

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之二

東都　曲亭主人編輯

中輯第廿三

友を引く小松の宿
途に吻く轍の江鮒

朝夷三郎義秀は江三三廣光を伴ひて。義郎の迹を慕ふて。加賀の小松をさして當にいそぐとすれど。廣光は曩に八嶋室平が黟兵に柱しし左の股に薄傷を負へり。させる痍にもあらざれば。義秀には告ざりしに信濃路に出し比より漸々に腫まし痛ませく。歩の運びも自由ならず。よろく頻に焦燥のよし亦でんまべもあらりけり。義秀はとのとに廣光が金瘡をもすめさく知りて驚死喜をひかくてはいく義郎に追著ることかのふからず。有繋に捨ても去かたし。或は勦り或は激し。技撿々ゆく行に思ひの外に宿りをかさねく小松の郷まで來つれ

ども佐味笠内ハ鎌倉に召使れて今この里に在らざるに義邦も亦いろまぞか。後まて一人〻を其処に侍べらせぬれども井平ハよろづに心利たるものなり故此里に旅寝して侍よりやと思ひしに両人道次よりつらねてきまゝのるを相譚ふに義秀ハ去歳の九月この地に遊歴なしけまゝ安東内ハ粗知れり。且くあゝに逗留して冠者の旅宿を尋んとて里盡処なる客店に宿とりぬ。やまが廣光が金瘡の膏薬を打せなどして両三日保養させ義秀ハひとり毎日に街頭に出て彼此を俳徊し彼人〻を索るに義邦も井平も面影似たる人にだも得遭ねど。その次の日も晨明て旅宿をたち出て里の圯橋をうち渡りて申明亭の邊を過るに目今新に掛けたるなるべし。高牌の下に人の骨相書三四枚貼たるを里の老弱路多く人〻。見んとて其処に集合て肩を比べ肘を連ねて蟻の甘に附に似たり。

義秀ハ高文の形勢なゝろがゞのあいだにあふねハ衆人の後方より爪立揚げてこれをみるにこの骨相書ハ別人ならず義邦主従と井平となる男さへ写し出して罪科の趣を記し若搦捕て進らせバ如此〻の賞禄をとらすせん在処を知るもの訴稟さバ同類なりとも其の咎を宥免てこれにも賞禄を賜るべしと鮮やかに書てありける原来まぐろ人ありけりと思へども騒ぐ気色なくさらぬさまにて立退ろ足早に旅宿に還りまさて廣光かれ同様てゝと高文の趣を密語バ廣光かりくも驚ろきもろ身もろハ患るに足らず。冠者ハ何処に在まさん我ろさもとるも限りなく加以朝夷ぬし和君さへに高文あらバ臍を噬とも及ひなし某さバうち捨置て疾脱去るの人とらふ義秀かのく気色ぶちそまへ謂まぬ口誼ありの和殿が金瘡いまだ愈ざる進退不便なまべとてうち捨て走るあらバ足利きて矢石を犯して。

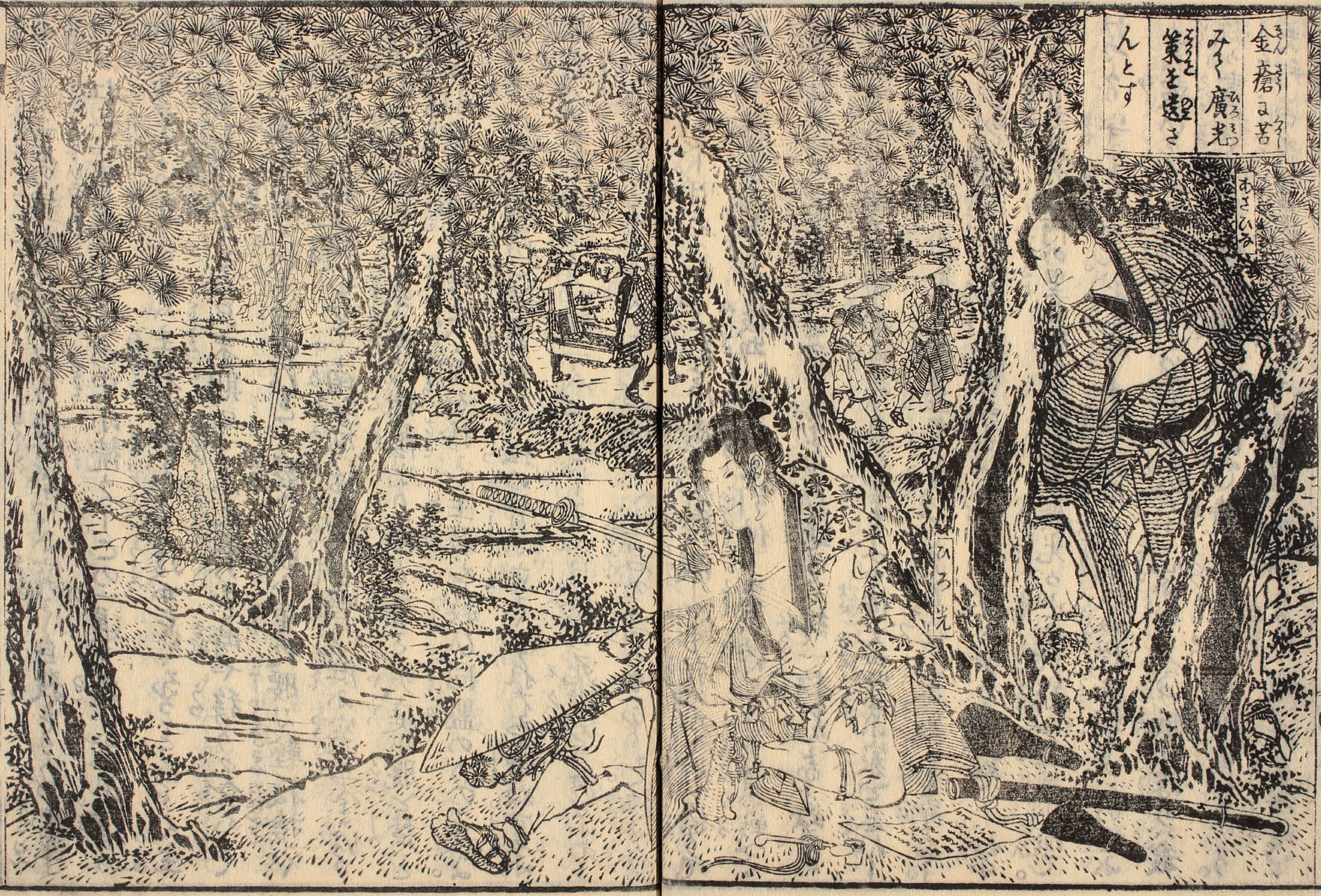
いつでも和殿を救ふべし。勇士ハ元を喪ふを忘れずどさまバ命まで義よ
よりて鴻毛より軽かるべし。今更驚くこゝろとうふを自ら激させバ廣光感
涙を拭ひあへず。かくまでふかゝる義。おのがおろかのまくにせバ君が仁義を志て
ぬふ似たり。然れバとて共侶にきつとよまらんハ究て危し。いふせまりし當
惑の小頸を霎時傾まふ義秀ハ又死さるゝ戦解死後方をつくりて。
長談ハ憚あり。所詮和殿を技拔て越中婦負の山石神ある稲向
判五が宿所やがて退くべし。日まじものに熅子井平ハ思慮あるめの佐味が
この地よ在つまじと思ふがゆゑに冠者ハ倶して虐ことまてらに逗留させぐるあるぞ。
何とあれバその夜さり和殿ハ一人留まて領主の討兵を引受さうあらバ
その初より和殿の存亡ハ定さし。又義秀が和殿を救ふまく共ふ迹より来
るとまふなバ久しくこの地よ侯べくあらず。倘彼藁二郎を傳遣せし。和殿の
内室淺良井どの途ふ冠者よ追著さらバ日ごろ口状を必傳人殊あらんあらバ
吉見殿よの小松へハ赴かず井平ホ僉共侶よ稲向許落著て吾們を
俟ふやあらん是も亦知るべきまでそハとまれかくもかれ追捕の沙汰嚴重なれバ。
今ハ霎時も留りがたし。只義秀ふうち任しくとて出立べしといそがせバ廣光この
議よ從ひて苦痛を忍びて行装をその間ふ義秀ハあまだ紙包て房銭と
取らせ同行の病著も大かるふ差あらぬ翌と思へど左よ右ふ心いを死せらる
是バ今より起ても四五里ハゆくべし。復まそ來めとのひろけくえや外面へ立
出れハ廣光も後よ跟えて疼痛を忍びてかろ共ふ板敷ふ尻をかけて。
草鞋を穿え行李を背負ひ登るくして出る宿よあらざハ門邊よこまと
送りて後の宿りを契をけり。かくて義秀ハ廣光を勦あろく越路をさして赴
く。廣光ハ人目なるり旅宿を出る時ふてそ馬歩ふ運びりしまーよふ堪さ死

疼けなれバ一町あゆみてハ立とゞまり。二町あゆみてハ息を吻ぎ。いと悩しげに見ゆれども人目あれバ。義秀ハ肩をかしもえならざれバ。手を携まゝにとかくして小松の郷を出離るゝ一里あまり来つれバ。六日ハはや未の下刻になりぬ。此処数十町左右ハ芝生にして松原あり。廣光ハ甚く疲れ苦痛腸を断可なれバ。一歩も運びかねて松の株に尻をかけ。背を幹に推當て眼を閉る顔の色さへそと見えて。義秀ハ遽しく懐なる用意の薬をとり出し。いく遍となく是を勧めて去るに。勧まれバ廣光閉る眼を勝て。朝夷主よしなきおのが羇に縛りて。さそふなるハ焦燥なん。只いちはやく去りたまへ。とてもかくても此の痛みでハ露命もすでに竭ぬべし。冠者の先途よあハざる是のミ死後の恨なれども。歎きてその甲斐あるにもあらずと。覚期究めてゆくといふ声さへいと弱りけり。義秀これを聞るにこそ女々しく見ゆるを

いかにぞや。和殿深手にあらざれども。最長途を走りしに再傷を起させ。命に恙やハあるべき。此ほとりより人家ハ尚遠かり。路なく人も稀なれバ。今宵の宿もなし。背肩にせん。心よわしと慰めて。屈で背をさしよすれバ。廣光頭をうち掉て。よしや里へハ遠くとも見る人なしとハ定めがたし。己を負て人に見られなバ。必ず人に怪しめられて禍甚れに起るべし。只うち捨て走りたまへ。疾とく去りたまへと。いかにいふべくもあらざれバ。義秀声を激しくし。復してもいふべき事かハ。義に仗とるハ両人合體。和殿が病ハ己が病。和殿が死なバ己も死べし。背肩にて人に怪しめらるゝ事あらバ。それまでの命運なり。何を躊躇ことやあるべき。と手を取りて肩へ引被け立んとするに。廣光尚かく引放ちやよ待たまへ。かくまでに諌るを。いかで推辞ん。いかで随ひまつれども。息絶しくて堪がたし。水あらバ只一口咽喉潤させてたまハれといふに。義秀

吟じ。手負に水ハ忌むものなれども。これとてもとく飲せずして命終らバそれも益なし。只今負たる疵なれバ薬とてもに與んによしなかるべし。死と肚裏に尋思しいかで起あがりつゝ。ほとりに水ハなけれども田井を索ねて汲めてまゐらせん。且くまちて候へといひて腰なる瓢を採て迫に見ゆる山田の裾に樋の口あらんと思ひより。点陀足に信しく走去けり。廣光霎時目送りて流るゝ涙を揮拂ひ。日来ハ猛き壮士が心のどけく扶掖き背負んとするぐ真成に勤る誠ハ親族でもよに有るべき。好意旅ハ伴侶世ハ惻隠と彼諺も今ぞしられたる。つれなきものハ命なり。さまでとて只さ敵に彼人さへに支に遭バ。是れ彼人を害たるらん。かくて義といひ信といはんや。疵ハ灸所を外れさきでも。破傷風とならバとてもかくても生がたし。縦霎時存命とも帰負もていかでかなるべき。只この侭に自殺して彼人の為主君の為に。

策を遂べし。吁さなりと思ふまゝ。氣根激しても弱りゆく肘を膝りて左りゆく腰なる矢立を援出し。懐紙を引伸し墨ハ涙でもよ首の戦ひて筆の運びさへ定めなき。世のはすがらまひ遂るハ縦一枚のかきなぬ身のなれ。現今紙限りの命毛と。ふかれバ妻も子も候ん。忠義に家を忘れし身の紙何歎くべき。愚癡なりき小三二ハとて大さく身君に仕て。なき父の志を嗣よや。なひろけなく朝夷生の男の家に身をよまさまバ。とがとも去て在ぬべし。かゝるハ此主君の亡。何の里にぞありとも。廣光が亡魂ハ影に立身に添て。けのかり守まもるらん。かくいふも朝夷生日来の好抱受なりし。この世にして報ひずて名残惜やといひバえふいかぐ心がかりなの胸に浮めバ哉放ろ書損ろ紙引裂きて。筆をとゞめて讀む一通。追捕厳重なふよう。義邦義秀并平ホハ云云の河原まて共侶に入水しとかいぬ某深疵を



金磨ハ苦みて廣光策を遶さんとす

負しハ主君の最期に後まゐらす。進退ここに究まつて自殺をとげたる也。年月日江三二廣光とふところの中に読くしこの一通を遺しおかば追捕の沙汰も是より止んならば主君も彼人とも後やすくあるとあらん。主君我憑む彼人とこれのみ末期の寸志をおもへど時や移りなん。さればとてそのまゝ坐を占くいそぐとほまで衰へし。腕に重き腰刀鞘抜捨てとり直し背を松に倚せかけて南無阿弥陀仏と唱つゝ肚に突立んとするをぞ。將に窄よ待てしばしと義秀ハ樹蔭より衝と寄て矢庭に腕を楚と會和殿重病身に逼まりハ命を捨て主君を救ひ同盟のめさんよ。後やすくせんと謀りし遺書ハこの松の背に立てられそや讀ぬ寛に忠義ハさうとあれども和殿一人死まべとこく自餘の死骸を見んほふにあら孫ハ入水といふとも実事とせんや死して主君の為にもならぬ仇よ會

詮のなからま我迷んハ愚なくぞや。且この刃を放すなと理り追て諫れど。廣光ハさすまる氣色なく此期に及びて千萬句も問答ハ益なきぞ我を放て死したべ。禁ざるハ情に似て情なしと怨ほまじ。義秀ハ彼あくばいなく殺さぬ死をとるに及ばず和殿ハきつとよ亦活さる。その譚いかんと刃を奪ふて鞘に納めて引提て走出るを抗てもかくとさし招けハ先に進みし行客両人後より一挺の行轎を扛して喘ぎ走り來る。この行客ハ別人ならぞ岩神なる二三之蕈二郎共侶に彼根が堂平に使輿を舁してまつよ集會り。蕈二郎ハいちはやく廣光と見て聲をかけ二三二主ここにゆくゆくまで窶まて心地ハいかにとふをると訊きて廣光ハ見かへりてこれハ〳〵とばかりに霎時苦痛を忘るをかぞに思ひかけぬ再会の歓び氣色に顕まてるを。當下義秀ハ廣光に二三を

指し示しゝ江生ハ見ざる識ざるべし。しかるに恩人その名をだにしらずハ豫ていひしが。庄司殿の一三と告まいれハ廣光やをもく欣び膝折數くを一三ハ禁めて聽て對面を蔓二郎も傍よりて三二ぬしハ僕さへよこの処へ來つることを不審あやしみしが僕ハその夜さり朝夷ぬしの指揮に從ひ内室孩子自らに俱しからうせ夜を日に継て急しかバ幾日もあらで越中なる岩神の里稲向ぬしの宿所にいたりて一三殿に對面し。竊に緣由を告さ朝夷ぬしの消息をいだしゝ。隨に遁与にけれバ躬さ閑室に招入られつゝ夫婦出迎て。朝夷ぬしの安否狀問浅良井殿によりて小三二殿を慰さ候。その歎き等閑ならぬを友鶴にも對面して朝夷殿の里へなれよし。あらうめさせなかつとうくまのあとの母子を奥に潜せ僕に酒食を賜て草鞋錢さへ牽れさうかゝて次の日僕ハかへりまんと思ひしにその曉がた

より胸痛しく天ハ明ぬれども枕あがらぬを。おのれハ親を刀野に離せ復や故主を寃家の爲に隷られるが朽をしさに親苗四郎が柩を親族にうち任せ小児を背負その母御を扶掖て幾十里の長途を来つれ此彼の心労によりてこれ見より毎日にあつしれ夫婦一三ぬしの真成に人さへ冊へゝを病せなからに醫療等閑ならざれバ僕ハ四日ながらへたるかまめく。胸痛ハいよ〱重り一三さまバ又その日より沙儆冨樫の下知としかく吉見主從朝夷ホその後をたずねて四人胥相書をもて索く候。罪科の趣如此々とてや岩神へも徇られてこれより圍宅一層の憂苦をうちしくものびくふとやんかくやあるべしと主人ハ夫婦友鶴どの。僕さへよ額を合せ浅良井どのに相譚ども先ざんめハ涙のみ。往方もしらぬぬし達と案じても其智恵ハ出ざるよしども聊より手がゝり。

冠者殿ハ霄の間に井平といふ和郎を將て。加賀の小松の佐味筌内を心あてに出立玉ひけん。二里ばかり外に援てもかくハあらじと浅良井どのゝ告る我聞けバ、見さもあらん。佐味ハ小松に在らざれども冠者ハこゝまで知らず、かく赴きたるならんともいひがたし。さりとてハ二三なし。此方の二郎共侶に又唯冠者の跡を追て加賀へ赴くもあるべし。かゝれバ僕に往方を志るしたりハいで来まつり、四人小松に落合て互に向て来まさバ、いつしか途にて旦にあらず後悔其処に立ざらん。いかで竊に迎とらんと商量既に一決して、さまで早なまし。冠者主従溫子と母らんが面。影ハ絶て認らず。朝夷生に逢ずして、彼主従ハ先遭ハ何をもてよしとなせど、せんこれも又不便のなるいかにせましと躊躇と見へ、蒹葭二郎も共侶になりかんといひはちかくうつたへたり。當下又愚按あり。吉見殿ハ面色白く一下際目ざろ

徐とぞ仰のく。これをバ後に隠さバ、人目の関を越えかゝらんと思ひなれバ、心まゝなれど根ぬけ荳平さへに將て、昼夜を分ず途をいそげバ、小松の里ちかき山田の裾を過ると見、朝夷とのが樋門なる水をとるに端なくあひぬ。そのと見の歎しさ今なほ胸ハ躍りえ、さて立ながら互に吉夏を祝しくいふるぞ。いひ受たる我受けバ、冠者の往方ハ志らざれど、三二どのハ金瘡に患つまで、彼処なる松原に憩ひてありしかバ、爰にて各位に逢つるよしを告べきよ。跡より来よといひあへバ、松原さして走かゝる。朝夷どのゝ足代勝まどいくて後れくいと声低しく、抑へまハ義秀も又傷よりて江にまよ。あれを受たる欽蒹葭二郎に誠心あまども、吉見譜守の家臣になまぞ。稲向夫婦と二三とふ義秀ら縁者えまる為も、猶冠者の為に心を用るに斯のごし。和殿とてまた友なり。臣え日来ハ心を竭しても、竟に冠者に遭ぞ

冠者殿ハ雪の間に井平とゝもに和郎を将て加賀の小松の佐味竺内を心あてに尋出さんとひそん。一里より外に投てゆくかへあらじと浅良井どのゝ告る所聞けバ実さもあらん。佐味ハ小松に在らざれども冠者ハこれ紙し知らざれバ加賀へ赴きのゆるよしをとふいひかてさやうと見ハ三郎ぬし。此方の三郎共侶に又唯冠者の跡を追て加賀へ赴くる事もあるべし。かゝれバ徒に往方を尋る手がかりハなくて来りて四人小松に落合てまた向てく来りなバかのしゝ途中にて又にあはで後悔其処に立ざらしめて窮に迎んとせん。と商量既に一決して旦暮ぬべしと早まゐし冠者主従遥子と母らん面影ハ絶て認らぎ朝夷生に逢ぎして彼主従に先遣ハ何をなてよ見ぞとせんこれも又不便のことといふにせまりしと躊躇と見蒿二郎も共侶にゆかんといふにちくさうつゑくりし当下又愚按あり吉見殿ハ面色白く下際目ぶろ

刀祢ときのくこれをバ後に隠さバ人目の関を越てかゝらんとおもひなれば心ぎまなし根ぬ笠平さえに将て昼夜をいそぎ途にいそぎしげバ小松の里ちかし山田の裾を過ると見朝夷とのが樋口なる水をとるに端なくまひぬその と見の欽しさ今なほ胸ハ踊るえさて立あがりまた吉兆を祝しくいふるといひ覚えぬる所、受けバ冠者の往方ハしらまぐど三郎どのハ金瘡に悩つまて彼処なる松原に憩ひてありけるこれなぐ来りて各位に逢つるよしを告べ見えよ跡よりきよといひあへぬ松原さしてきかゝる朝夷どのゝ足只勝まとひつく後れてゆくと声低して扨こまハ義秀も又傍より江口よ。あれを受ぎる欽蒿二郎に誠心あれども吉見譜第の家臣にあらぎ稲向夫婦と二三とハ義秀が縁者たるものも猶冠者の為に心を用ると斯のごし和殿ともまた友なり臣え日来ハ心を竭しても竟に冠者に遭ざ

しばし岩ひらけて死人の助けなりつるハ佛の不可思議。儒の所云天の心に適との後に乗移り岩神へ赴きて療養生を為し給ふ。吾ハ和殿に成かはりて。亦復冠者の往方を索んとぞ。と勸まゐらすれバ廣光感嘆慚愧して涙を禁め難くも忍ぶど太息をつき孝子の門にハ不忠なく義士の族にハ薄情なし。再び必死を脱まるゝハ皆是和君が賜なり。廣光がこの恩ひとへに半冠者に分ちなせバ今さら物をおしまんや人の情にしらまバとく主君を迎られん為昇せて来る轎子に吾倚乗んハ物体なし。といひせも果さで其ハ愚癡之和殿が後に乗らぬとて冠者がまつて来ぬやさんやころに命を全して後日をあつかる眞の忠信杓子を定規にいひうれぬ。ハと罵激しく一二と藁二郎目拭注れまハ両人齊一廣光が手を合せ腰を抱え揚ぐ。ことすなく後輿に扛乗せたり當下根以茎平ハ息杖を横たへ。義秀がたゝと

てまに居よりて恭しく跪きて主従の再会を祝せしバ義秀これを労ひて廣光が人を委ね藁二郎が耳を引く。云云と密語バ藁二郎うち点頭根以ホに意味を傳て後輿を擡出さしつ。その身ハ後方に引添て舊来し路へ赴きぬ一二八そのまゝろ残りく。そがやく残留まハ義秀ことをうち對ひて。松の株に尻を掛阿爺ハ廣光が氣色をつんぐや渠童病よ焦燥く。腹を切らんとしつるを吾倚折よく立より。更に阿爺ホが助けなりく。遂にその死を禁めたりのみでも女才ある身なれども寔に重き金瘡なれバ只々抱き憑むのみ。某ハそれより別まて。義邸井平ホに環會。廣光夫婦がまてろ休み稲向主夫婦友鶴ホよよく。まてろ残りて身まとといとひらけく立んとなすハ一二勝て推とどめ。さてもく聞えぬ人かな。吾倚がまてろくまてやまく来つるハ誰が為ぞとおもひ給ふ。侍の沙汰を背しより稲向殿のおものひ内室の周章悲歎友鶴どの平にも

あくぎとのひく腹に手を當てさらぬも日にまし目にそへて間なく透なく是首の隅彼処の隅に泣ゐたり。さはれど乱に病む二親を見るも鬱悒胸くるしさにのぞで和敵に環會。ねてかくてんと思ひしぞ兎毛可の心あて我よるべに晝夜長途我走りてふかくまで逢ふかなる故何処へ遣るべき我のふが虚言欲実か欲ハとゑんを見んとく妻子の歎きを思ひ汲ミ且岩神へかへりなん。還りなんと繰かへし。遽しく懐を搔捜りて友鶴が書封をとり出てゝ見に遽せハ。家系封皮を斷彼処讀果して幾條に引裂て袂に納め女子ハよろずよあかくしく心狭きのかなれど。かくもあへ死るなるが。勇士の妻ハ似げなき所行假際の別を惜ミ。窮屈に驚魘て夫を膝に引著ちくとも。天の作せる禍が福と成るべきや阿爺よく思ひ見るべし。これ友鶴我娶らぬ前に彼友達のるをバいひ。あなたの妻子の顔を見んとて。危窮の友を憐まバ。初より友垣を結ハぬにましく遽ざかるある

まじや。と義に勇む誠を感じて一二ハ又いふよしもなかりけり且しく弄つるゝ。松葉を捨てゝちらち拂ひもとも彼友達の在処を知でむなしくにおる縁が。一个月にあふべき欤。二年三年にして逢ふべき欤。あふと逢ざると不定なりや一下ふたび岩神へ還りて更に旅立んとも今にして遅きにあらじ。路次に面を曝さんより。隠れて時を待べけれ。おのれ寔に膂力ありとも旅にあるんハいと危し。枉て愚案に随ひ給へと復諫まさハ。莞尓と笑ミまつるのゝ母をとるゝ。幾千騎に囲るとも。一人境をゆくより易し。倘運竭なバ小敵にも太刀折れて生擒れん。かくて鎌倉に牽るとも。これおのづから處分あり。命に恙なかるべし。彼友達我索ふに二年にして遇ずハ二三歳が程まで岩神へ還らんとまたのよしを稲向氏と言侍べまくさにてゆく阿爺にあひぬまじハ心かなずもあれバと惜む去歳のその月。浅良井に預くる母の像見の舊衣そその夜さり彼女房いと暇しくぬされバ。

取忘れしに疑ひなしと見れバ。一二うち微笑て。吾儕も認たる。母御が手織の単衣被なりしたるにあらんぞと見えん。それなれバ今なほあり。和主が身にもかえかし。とりあへず領けし衣なれバ。これのその宵腰に著て吉見の宿所を出なりと。浅良井よりが物たり。友鶴との不慮与へし一紙。吾儕も其処に居ありて。和主が孝心彼婦人の篤実律義よ我折たり。今なほあるハと説示せバ。義秀嘆て頭を拊き。然ば忙し死折なるに。ふりたる衣もこゝろなくに二なき宝といひまし一紙。うち忘るゝもせざりど携へ来て。友鶴に遮与されしハ。流石ハ武士の妻なりけり。人こゝろなる信あり。これ亦信なるらんや。友鶴ハこれにも愧て。こゝろ人をお歎くべきぞ。只彼衣を実の母とも義秀とも見て慰めよと。かくまでも倚て泣。今宵ハおなじ宿なく。なほ相譚らんとおもへども。又義秀が面を見んずる。三二ハ一旦のひつけとに慚て。黒なるこゝ死もせん欤。さるによりて藁二郎とこの

松原のまなさゆく。和殿を等と密語て。渠等を先へ遣しけり。今ハさぞ待わびしらん。日影も既に傾きぬ。疾去ねといそがしたまふ。一二去べく。嗟歎ろ。壮に巻たる行嚢より。一包の金をとり出し。これハ緊要の料にとて。稲向ぬしの遮与されし。切てまゐらすバ受納て。路費にせられまバ本望なるらん。凡人の了簡ハ勇士のこゝろと表裏ありて。まへずく及バぬことのなれバ。立かへりく怒りまし叱らるゝとも。岩神へ仕んといふのみぬえ。やんずそやとまた納め。と真成に勧まハ。義秀取あげ戴き。この高金ハ分に過たり。されバ男の好意これさへ推辞かし。路費に充べしと。懐中へ楚と納めて身を起せバ。一二も亦身を起し。和主ハ何国を心あてに彼人達を索なふぞ。おなじくハ友鶴との人一筆もアとも返さずと。いふまで延に西をと見ん入り。彼井平が舊里ハ近江の甲賀と聞たるあり。又信濃にも氏族あるべし。さまで必冠

者に勸て由ある里に留まりなん且江信二國を索て遭ずハ亦復便宜に任せんその先にて定めがたし又友鶴へ返書のこすハ不慮の證据となるべしあり或ハ途にとり遺し或ハ賊に掠らるゝことあらじといふべからず口づから阿爺よりのみ傳へさせよ。くれぐれも患人の懐抱を以て憑むなれ。そハ宿にかへりなり。いざとて五六町共侶に中く夕日影樹間を漏り擁うち名残ハ竭ぬ林原さらば手にゆく別れんとて義秀ハ歩を駐む。又小三ハ叮嚀に再會を契りて途横ぎりてゆく人を木がくるゝまで目送りす。

作者云先板第二編巻の四の二丁の左より二丁の右に至て義秀ハ浅良井小三に藁二郎を冊けて越中婦負の岩神なる稲向が宿所へとて落し遣せる紙廣光に告る隨に藁二郎を悞て引太郎と名つけたり。彼引太郎といふ者ハ第二編の端像にもみえて藁二郎が從弟又六ハ忘野の松原にてその伯父笛四郎と共に時衰に發されぬるハ悞たる雖もあるべし。作者の心つかぬにあらねど刻成て後見出せしハ正し補ふ暇なくて。そのまゝに發行せり。因てしるしつくるのみ。鄙語にいふ證文の出し後れとのゝしらん歟

中輯第九四

山寺乃古塔婆

駒形の老淫婦

吉見冠者義邦ハその夜さり勝澤の松原にゆく。後陣に敵を禦んとて。井平と立別れ西を望て走りけれども仇に遭ハず。なほ伏兵のあらんかとて足場を揣り樹立を楯とし。半晌許立在むほどに曉近づく天の色慘忽に結陰て。颯と音して風のやゝ吹く驟雨盆を覆すが如く。樹陰もたまらざりき身ハいたく濡に濡てけり。さハあれども井平ハ今

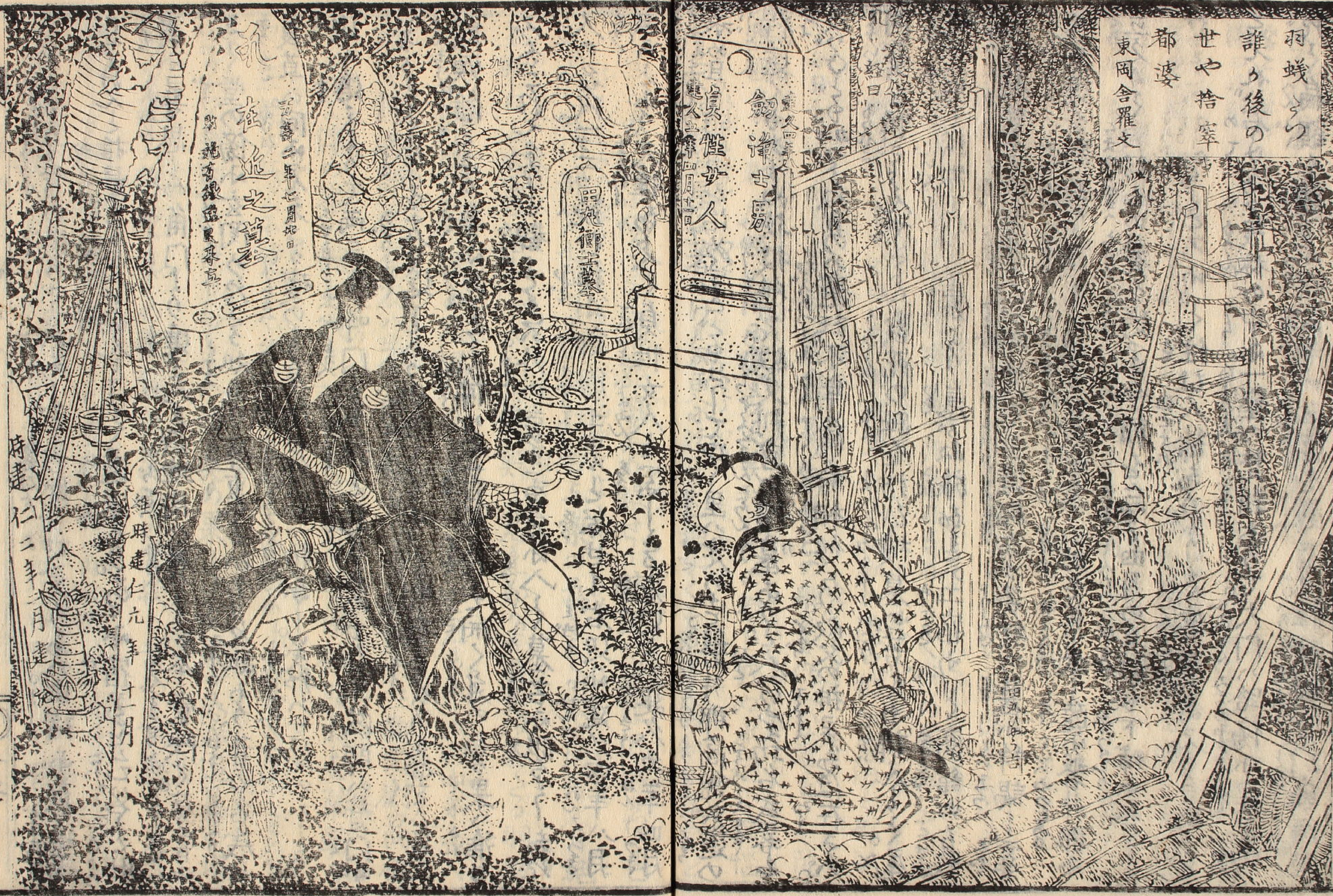
かゝは讐言を拄る欽數ならねどや。と想像る心も天に野干玉の暗かる人に降そゝぐ。雨に樹蔭を出難ければ。そゞろと稍に雨歇雲ハおさまりて星の光りも明るに迫り。今までも井平が。敵の囲を脱れぞ來ぬハ疲れたりけん。不便なりかりせば共侶に大刀の刃の續くかぎり只切死に死へ死ぬのぞ。今ハさハや時移りぬ。立ち帰るとも甲斐やハある。井平既にかくの如く廣しとも今さらハ領主の討兵を拄りて。擒られし欽數ならし欽二ツに一ツハ遁べからぞ。愁られのゝ存命て。誰とよばれ艱苦を凌ん。死ぬ死時に死ざれハ死するゆハやゝを恥辱ならし。腹を切らんと立ながら。刀の鞘に手を掛れ。ゆかりよれながら短慮え。死ハ易しく生ハ難し。と二井平ハ驚きしかも脫しも定りあらぬに。早まりて死なバ。亡後に彼ホよ恨られやせん。その存亡ハ定るよしあくとも。既に斷金の交ある。朝夷生今なほ覗に加北にあらんや

この人を訪てんぞ。ともかくもせばなれと。胸月に向ひ胸に答て。被なる衣をかえよせ絞り。潜ぶ便の桧笠取りかぶりしと戴きつゝ。北國を投て赴きけり。心はやくしぞ急れなる。さる程に我邦ハ。ゆくといへども幾里もあらで天ハ明への往還さへ鬱悒なれバ又さらに再度の追兵心もとなし。間道より進んとて。路なき途に分け入りて。熟ぬ草鞋ハ破れはてゝハ荊棘を侯で足に血を染め長き裳裾ハ裂ても拂ハね草むらに露けし。或ときハ甚さる野水に臨くりが面影の窶に驚きて。或ときハ嵯峨なる青巌に吻えて樵夫牧童よ途を向ひ朝ハ林鳥と共に出ぬれども夕の棲宿に或迷ひ昨ハ郷黨の上に在り。今ハ萬里の客なり。日に歩え夜に宿りかくして加賀國小松の郷にすかく訪へバ佐味笠内ハ蹴踘をもて新将軍（御）頼家に召使され。去歳の春鎌倉へ参りしまゝと傳えしつバ我邦ハ漕舟乃汀渚よ

檝を失ふごとく。進退甚処に極りて。又いふともせんすべなかりし。笠内かくの如くなかにそよ吹風の便りにも。その比までに告ざれバ去歳のその月朝夷生と紹介ありしこそ悔しけれ。彼人ちかく尋来て。さてこそ吾儕を恨みけめ。この春までも消息の聞えざりしハ。この故なるらん。さハ何とせんとてうちかへし。思ひ苦しく立在り。さてあるべきにあらざれバ且客店にその夜をあかし。次の一ト日ハ逗留して。ひとりつらつら思惟するに。井平も廣光もけふまで追ひも著ざるハ。或ハ撃れ。或ハ又搦捕れしに疑ひなし。かの小松ハ商賈多く。いと熱閙しき里なれバ。させる知音のなきとても。世を潜ぶべき処にあらず。されバ曩に義秀卜絡庵なる陸奥へとて去んとせしを。これ幸に紹介して。佐味を憑みて遣しつ。さらバ笠内主ありとだに義秀ハおもよりして。又更に陸奥へ赴きたるもあるべし。恨しくハ投て里の名だに聞えざれハこゝまで又跡を慕ふて來なり。

さりとも縁盡ずハ。五十四郡のいと廣きも。などか國に在らんや環會ざることやハある。さりとても陸奥ハ大國也経任が乱ありしのちも世を潜ぶるもの便宜なるらん。徑直に彼地へ赴くべしと思ひ決つ。あしたを俟て奥へ也。道の程を問ふべき為に客店のあるじがいふやう。こゝより奥羽へ赴かんにハ。いと遥けき旅なれバその途究めて難知多かり。水行を好み給ハゞ。當國川尻湊にハ奥へ渡る便船多かれバ。ここよりぞ件の港口ちかく六里有餘もあれバ。いと年弱き方さまの独行にとりてハ。おなじく水行よかり。赴きねかしと勸めたり。義邦つくづくうち聞て。むかし文治のはじめ。わが叔父九郎判官が。からく冨樫の関を越て陸奥へ赴きたまひし時の途の艱難古人の蹟ハ人の口碑に傳へて聞つ。そハ主従七人也。これハ只身ひとつなるに水行ならでハ叶ハじと思へハ途ハ石上ふりにし古人の蹟までもこれを憂るにかゝさ

まく心にぞさふ急がせども去らぬ容にあて船しハ詰旦旅宿を出て川尻の港口に赴て便船を求るにあるハ越後の新潟出羽の象潟へ交易船の往還まるで月らく絶ることなし。この日も奥の商船帰帆の纜を解くなれバ。義邦是に便船して大洋に浮みけり。されバ朝夷義秀がかく廣光と技抜て小松の郷へ来つる日と義邦の乗船と同日にて朝と夕の差あれバ。竟に遂ずよ是をあへざど只是時運といひながら。一日の遅速によりてその往方をもおもふよしなし。遺憾ゐべかるになん。かくて件の商船ハその日纜を解きしども次の日より順風罕にて。此処の港口彼処の泊と船歇りに日を送り。四月に及て著岸せり。されバこの船象潟へハ著ずして陸奥國氣仙郡尾崎の浦に還よる。義邦ハおの数日熟ぬ水行に捏悩されて浦の苫屋に著にけれバ更に活る心地してそぞろあく其処に旅宿と求め且く疲労を治めくましども。さしてゆく里ハ定めねど磐井郡高舘へ入る道の程遠くもあらぬ欤。彼処にハ叔父判官の墳墓ありと人ハいふ。功名武畧を及ぶ者もかゝらぬものハ寃枉。不幸薄命相似たり。叔父の神霊なほ在さバ。同憂を憐ざらんや。さらバ戦死の趾を訪ひ墳墓の苔をも拂んとて尾崎の宿を出れども素より急がぬ旅なれバ二宿して高舘の古戦場を歴覧し。水を渉り山路に入て。玉造郡なる義経の墓に拝謁し。要時武運を黙祈り。懐舊の涙を拭ひながら山路を舊来し随に磐井郡に立かへりて。駒形山の麓を過るに今朝を忘て四月の日影も下晡になりぬけれバ。この処に宿とらんとて住む人稀なり。やうやく客店ハあらざれど。ところが右になる茂林の中に一座の梵刹ありて大門ハ路傍に建り。仰ぎて扁額を瞻るに指月寺の三字を題せり。柱礎斜に門扇傾き


貞性女人
劍浄士男
田丸御士墓
之墓
時建仁九年十一月
時建仁二年三月建

羽蝬らう
誰ヶ後の
世や捨窣
都婆
東岡舎羅文

さまでも尋常の造りざるにあらねど。秀衡が世ざかりにハ由緒ある道場なりけんと推量らる。日ハ暮んとして道遠かり。まつに宿かるところやと肚裏に尋思しつ。角門より進み入れバ地内ハ廣しく。本堂陝く。萱葺にして堂の傍に玄関めきたる処あり。庫裏とおぼしき処あり昔の名残ハ夏草の間に見えたる礎のみ墓所の外に一物なし。義邦ハ玄関のほとりへ近く進みよりて両三声呼門ども。誰と応るものもなし。法師ハ背門にとかうして。堂を左へ遶りて入るに。跌上りにて卵塔多かり。塁ねたる土饅頭離たる草に包まれて。拂ハねど昔ハ花ぞ開く身のある果ハ誰もみなこれ也なりと観ずれバ。外の家まじもあるに入りて墓石に彫ませるを見れ人の名残一ッ二ッ読む徐に剣浄士男と写せし右辺に建久四年八月云云とあり。又推あるべく貞性女人と写しる左辺にハ建久五年四月

十二日とあり。傍にありける窣都婆あり。録せし梵文ハ半體泯滅してあれども。梓氏治部丞七回忌追福抜苦与楽の為にとて正治元年八月施主敬白と大書せし二十六个字ハ鮮に見えなりち。叢殘まてくる羽蟻戮ぎ窣都婆の朽理に跡纒へり。義邦ハこれを見てこころの中にふかく訝りぬ。梓治部丞有友ハ先人の老臣なり。当初橋太左衛門尉高保等と共に濱の宿の館を戍て。討手の武士刀野傔杖照時を防戦ひ屍ハ三朝の兵火に焼れて。名を十年の今に留めし。忠義ハ傳へて見れも さりしが僅に残りけもなく。この陸奥の果にして渠が為に追善の塔婆を建しハ誰なるらん。その親類歟恩顧の者歟と昔の人の恋しくま同のよしもあれ墳堂惆悵として立在りし浩処に。廿五六歳なるらんとおぼしき男子。拷の夾衣の裾短なるを被て。腰にハ一口の短刀を帯びにハ

二本の卯花に阿伽桶を合せそへて。件の墓の邊にあり。義邦を見て又見えたり。その墓に水を沃ぎ花を手向て跪き合掌し。念果て身を起して又これを見る義邦も亦不審さに立も得去らずこの男子を見まバなほ思ひ得てや。進よりて小腰を折め。卒尓には候へどもおん身は。蒲殿のおん子と聞えさる。吉見冠者に在ますや。と問まく義邦胸打騒げど隠してはわろかりなん。と思ひかへして莞尓と笑ミ見れハ則義邦なり。抑和殿ハ何人ぞ。と問されて忙しく身を轉して額をつき陪臣の子で候へバ聞し及バせ給ひてハ候ハじ。某ハ梓治部丞有友が家隷馬粮標太が一子に同苗標吉郎と喚れしもの。故主で候治部丞ハ去ぬる建久四年の秋濱の宿の舘にして。討兵を拄て陣歿せしとき親にて候馬養標太も乱軍の中に討れけり。そのとき某十五歳父の教訓已を残るに母

倶して後門より逃れ去りて。この駒形の麓の郷士田丸郡内が女房ハ母が妹なれバ。躲て陸奥に落くだり。親子田丸に身を寓て年来経て候ひけるに母ハその次の年持病の血積によりて詰まりてはかなくなりしハこの月の今日が亡日なり。このとき某廿歳に足ざりしにうち続きて親を喪ひ。叔母叔母夫をよすがにて渡世の為と相譚ふに郡内に子なけれバ則叔母の養子にせられつゝこの地に駐りぬ。又駒形の一村ハ泰衡國衡滅亡の後漸々に凋獘しく今ハ家數四五軒に過ぎず。これより養父が所徳も年々に衰果て初にハ似るべくもあらず。これさへ去歳の九月下旬黄泉の客となりしが今でハ養母と某のミ所帯の山の木を伐出し或ハ獣を猟りて生活とつかまつり。さてこれまでハ鳴呼がましく。見ずしらず人を宣示ことゝおん疑ひを釋んがためぞ。かくて近属世の風聞に蒲殿のおん子白鳩丸ハ下野國足利にて

人となり。吉見の冠者義邦と名告らせたまふといふなれども道遠ければ。まだ見えもせず訪ひなさねども。されど今は成人しありて彼君にはあらざやとおもひたりの試に率尓に物のいひかけしを憚るの氣色なく言下に名告らせたまひける。是併古主梓殿及亡父母の導する欤。又實母の桂月なるも生活に暇なければ平日より遠く詣ざりしは不慮の見參に入りたるかなん。いと歎くゆゑあそびくすきもほしきなん。義邦頻に感嘆しく撥の伐株に尻をかけ。原来汝は梓が老黨。標太とやらんが子なりし欤。是迄邊境に呻吟へば舊縁の人と邂逅しく大かたならずもちつゞけたり。そも又汝はいつかしく。これを義邦と知ざりしと問れて標吉声を低め君しろしめさずや。追捕の沙汰嚴密なりて奥六郡のくばさらなり住む人稀なる山里まで。經任一味の反逆人吉見冠者義邦。それ等類某甲某乙と四人乃姓名を識しる骨相書に某も見つるところ君が面影彼骨相書に似させたまふことなれども。治部丞が為に建させる。窣都婆にさゝふるところありげに見て去ぞたまふ為体いと訝しく思ひしが。舊恩舊義の竭ざる所欤他人に如此見えまじく危きのみにあらずやと真成に密語ば義邦やゝうち驚き原来奥の書札によりても。これぞ人隠見なるところなり。現とこの磐井の一郡を経任が盾龍る平泉の柵に遠かれども。これ一点も逆意なし。然るを修羅五郎経任が一味与黨と載せらるゝはみな讒者の誣罔なれども一朝申し説盡しかて。汝故主の恩義を忘れず有友が為に七回の追薦をなせしその志極めてよしこれまでけに叔父判官の墓に詣てこの処に來て日は傾きぬ宿を乞んと寺内に入りて呼門ども応せず法師は背門にてとやひとく墓所を過らんとしつるこの寺伽藍の名残なるべしなどとかくかぞで

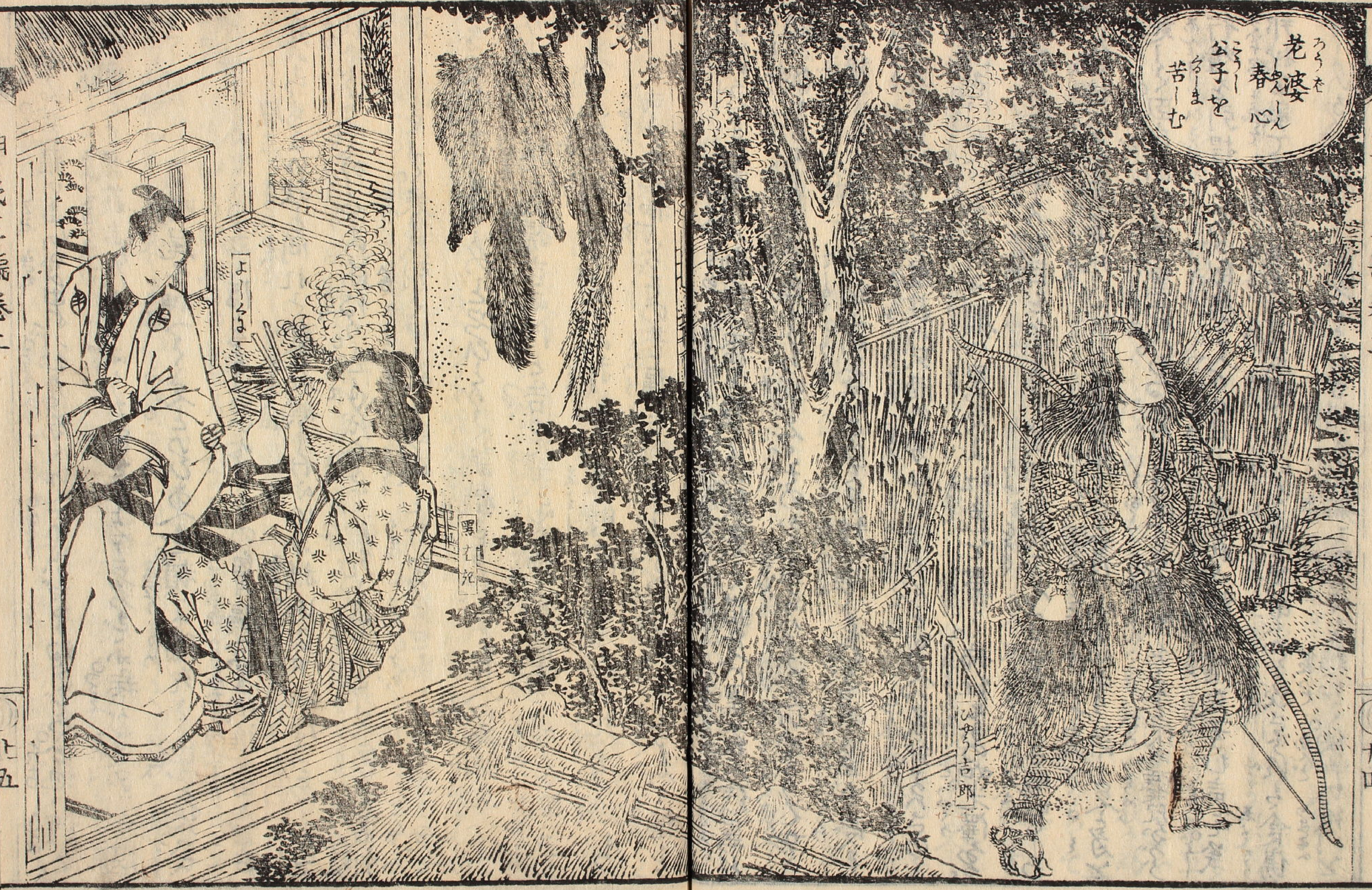
頼むぞと向ふて標吉さんハ鎮守府将軍秀衡ぬしの時までハ祈願所でありし。泰衡国衡亡びてより。坊料を失ふて今ハ同宿二人のミ住持ハ勢縁のなさに。この春より国府に出て寺にハ居らねど。某が養父部内が菩提所なれバ実母をも此処へ葬りしこの墓石ハ某が二親の墳塋なり又右なるハ養父が墓なり今よりハ四ヶ年前正治元年の八月ハ実父標太が七回忌に当まり。故主治部殿の陣没も同年月おなじ日なれど。標石なんどハ窣都婆を立て。経を誦せいはひもさせてん長物ぐるしさに日ハ後果らす旅宿をバ何の里に定めまいらしをなされども某が處にいりハ。山かげなる孤屋なりて。より十町にハ過ゆかぬ進らせんと。なまじ暦ひありて究竟の地に誘ふ郷導つかまつらんといふ義邦やとそで感謝に堪ぞ。これまで孤鴈の侶を失ひまる蝸牛の宿をしも定めざ不憶も義士にあらで舎蔵んといふにいぞうる他を求んや但その養母のうけ引くべきや否ざるをえらざるのミ否そのみの事なるぶ安き養母といへど実ハ叔母ぞ母の妹でゆへハ。鎌倉ハ故郷なり。これにハ包果べくもあらねど強顔なる欺待ハ仕るべきそのその性浮薄に似てあれども。年来悪意あるにあらず。ハ後安く思召まて幸ひ途なる出させの全と勧まふ義邦あらハ欽びて。角門より走り出標吉に導れて駒形村へ赴きけまあけく途まで日ハ暮るれバ標吉ハ憚りの関もあくて。義邦を宿所にぞ伴ひ養母黒萩に云々の趣を告に黒萩ハ義邦ハその心彼取んなるに。腰に纏る沙金四十両あるを出し。五合侑まつるに在らん爲。今交に不用乃物ぞ且く閣ておかれよと。惜気なく遍与ある人ハ黒萩ハその人を陥さるにあらねども。二の金を見て些も操縦せざ。遠まどひて飯を炊ぎ義邦に

勧めぬ。只いつまでも己が宿に潜せある人と化るともなほ欵待すべきに似ざり
けり。さてその夜さり義邪は幼野時夏に濡衣を被せられ冤屈に身をおゐ
うみて足利を走りしより廣光井平義秀ぶら人さへにおちもなく告のへバ標
吉頻に驚嘆し。養母黒萩共は侶に時夏を悪み憤りまた廣光ホ二人が。
往方のことを想像るまゝ縁由を他のしより。義邪の薄命をいたく痛まし
くぞ思ひけるが。親子が誠心に義邪は稍こゝろおちゐて吉見を逐電
せし夜より。僂れバ四十餘日。今宵ぞはじめて枕を安く寝に就なる
べし。却説標吉は聊思慮あるものなりけれバ。訪ふ人稀なる山里なりとて
一点も油断せざれど。その次の日より。義邪を奥ふかく潜せてその身はさらぬ
容よそく。山挊に怠ることなし。さる程に夏は過ぬ。山里に衣うつ秋の夜長し
比になりつ。されバ鄙語に人の褒語も七十五日と定めしも所以あるかな。義

邪追捕の風聞も遂に聞えざりけれバ。標吉は黒萩と商量し。吉見殿の
いとはる[illegible]えあるに。今は人目を忍ぶも要なし。渠は誰と人問バ。
鎌倉よ[illegible]標吉が老とも従者ともいひ暗めんに今は怪むものあらじ
とく義邪に由を告ぐ。あらかじめに憚らず假染に名を呼かへて黒萩を叔
母のごとく。標吉は兄の如く。おのづからひざるを改ざれバ義邪も亦あるじ親子に人目
ばかりは使かなり。抑件の黒萩は原は和歌鶴と呼れたる大磯の遊行女
なりしが。その姉は武士の妻なるに。なごく妹は河竹の流れに立しと恥ずるに。
黒萩は年十六のとし密夫に誘引出されて果は拙女に售遣られて夫は往方
しらずなりぬ。黒萩が二親は。これより先に世をさりしかど。姉なるもの慚憤りて。
年来安否を問もせず問せもせず過る程に。奥の磐井なる駒形村の
郷士田九郎内有一年鎌倉に出府して。逗留の間この和歌鶴にふかく馴

深く別るゝに忍びかねど。昔男の年期も今既に絶くになりぬと思ひて。身價も廉なれバ。竟に和歌鶴を購出し。故郷へ伴ひゆくに及びがたく。そが娵ありと聞えしが郡内ハ又さるに和歌鶴が為に人をぬく。その娵と娵夫に勸觧させより馬養夫婦ハ黒荻が郷士の妻になると聞て。心の中にふかく歓び躱て勘當を許しつゝ田丸郡内共侶に召よせて對面し。黒荻が衣裳調度を造り立夫婦に餞別さへ送らせなくとせしかハ。和歌鶴ハ。娵と夫に辞しされ郡内に從ひて。駒形村に赴けて。乳名黒荻になりかへりて。九餘年の星霜を送り。去歳の秋良人に後れて。孀婦ゆゑにあまとれども。舅を養子にあかく住まがよろしつとも思へど。昊裏にハ娵夫馬養標太陣歿して。娵とその子とするなくと鎌倉より来つるに。黒荻ハかゞ娵なかゞら。その恩義いと高けれバさらによく歎待なくに己を慎み。郡内も亦信あるのみなりけれバ妻の娵なくなりて後に標吉を養子にせしに標吉も亦老実なれバ。壮健なれバ養父母に孝行なり。かゝれバ一家和合して里人に誉られける。そが中に黒荻に一ツの瑕瑾あり河竹のむかしより今もなほ酒を嗜みて醉へハ男子に押易くみかゝりたる多くありたる。されバ孀婦となりての後も皺めかな顔に紅粉を施し。鎌倉様に結髪して。五十に近き老女に似げなし。現去歳の秋その良人郡内が世を逝りし比毎日に指月寺へ墓参りして彼寺の住持塞玄と親く物いひ初て。早晩に密通して人の嘲をうけしが今歳ハ塞玄國府に出て久く寺に在さまハ夫欲る折から姦邪の膽開る女子なくしてかゝる男態にうち惑ひて人あらぬ角を焦せどもまだ齢に比までハ孫ともいふべき弱冠なれどもその氣韻高けれバ戯れ言ハ若茸ゆゑのよろこびよしもなく。宝の山に入りながら手を空くせし心地して。五六ヶ月を

送りつゝ居ながらむかしに愛くしさのハいや増して堪らねども既に夜寒になりしに標吉ハ毎夜に獣を猟んとて暁かけてハ帰り来ず黒萩ハ折をよしけれど目間に物をいはせても情郎ハ見かへらざりき。あな能しやと敲ゑさき背月のかげに立寄る袂を挽かれて。自然触れてさゝら身さへなぞらへりける武郎ハ黒萩が為体に未果を腹だゝしくハあらまほしけれども気色にハ顕さでいよ〳〵暁ぬるをまちて。とやかくとてさせしハ黒萩ハなほよりもさらにそゝるがりさるほどに人既に十八歳色情なれにてあらざれどもそのゝすいと錐ハ苗に早晩稲なるべし。あまつさへ人に酒なくハいかでか情を惹しとあらんと窃に准備しつ今宵も子標吉ハ弓鎗を携て出しかバ黒萩ハ酒を温め肴をもとめしく武郎のほとりに按排から山家に際限もなく。世を潜せあいたらうおん気も鬱結れあるべし。一度過しく御寝なまし用意しくれなとの人の底意ハさらにねぎ推辞べきよしなけれバ武郎ハ勧らるゝ盃を辞く受飲盡て措るゝ人ハ黒萩ハ浅黒き額の皺をさらに白く莞然とうち咲ミつゝそのおん盃のかへさんといふやうやくとり揚てうち戴きつ独酌に両盞かさねて武郎へ進めまゐらすれども半盞も受ず困じ果てぞありける黒萩ハ只酒の勢ひを借らんとおもへバ武郎ハさのミの淫ひぞ引受て喫程に顔の黒きに紅色を帯て柿紅葉の如く光澤なる。蜂谷に張れし助よりも目を糸にして武郎を折てゐるいゝらしさ嘔吐もよほすべる心持ハさまで武郎ハこれをも忍びつゝ今宵ハ小恙あり。許し給へと身を起して臥房に入るを黒萩ハ名残おしげに目送りて盃盤をとり納め躍起ながら行燈を引提てものゝ臥房に入りぬ且して黒萩が頻に噫き苦む声を武郎枕を欹てきけバ老女ハ酒を過して吐を反くなへあぶさかれの食傷せしものなるべし。憎しともいへどうちも措まじ。躰て臥房を起出て納戸の紙門を


老婆（ろうば）春心（しゆんしん）公子（こうし）を苦（なやま）しむ
ひやう吉郎
異之丸
よしくま

推ひしぐ苦痛の声の哀なれバ見るに忍びなく、けんしまぬるぞや。心地ハ何と問ましく、黒萩声たえてうち臥せしより、とかく疼が発りて堪ず。額ハこの鳩尾を押へて、えどのひあへど、頰よ喘ぎく、已ざれバ義邦辞なふよしもなく、ほとゝまつハゐくその鳥月膈へ掌を推當て、若痛ハあらずよ、秋と問れて黒萩娯しげふの手摘過よ下ふなり。さすれバて欲ありとやかしや、ましふ待り。とよ、我合せて抱えよせんとして、ひゞ又義邦怒に堪ず、しで拳を引て黒萩が頭蹴と打のかゝ世恥を知らざる老女なる義邦をいふものと、思ひより調戯されや。こハ狂人の沙汰なるべし。向後を慎まバ、標吉に告るも我より愧よと罵て席を蹴立て出る人ハ黒萩ハ消ぬゆべくとるふ打まて霎時の物もいふまど起かり、ち俯して両の手に頭抱るそ。その苦痛半晌あまりてされがふひ、指を

もて額を拊るに須臾搖動し糸切歯抜歯も一枚脱ちけり。あなあな悲しやと吐出し掌に受載て惜めども、その甲斐なし。腹さしけふ当月ハ只浅間嶽と燃ましも富士の煙の靡ぬ人ふ今とく怨ハ復されど落魄人を扶持まとまで損ありて得ふしと、昔も今もいふあるに況や反逆野心の徒木を伐て草を刈拂ひて索らる罪人を舎蔵ものハこの廣い世界ふ二人とよもあらじ。その大恩をおもひよらまで、尻暖やる随に高慢て親よりまさて、女に見せ抗打がみがらる恩を知らぬ人でなし。情なし郎竟ゆハ思ひ知らせんものをと泣つ怨潛音ふ通宵ゆすり呟けり。是より先よ義邦ハ臥房よ走りぬ。てもそゞろふて睡らまでつゝしと思ひ入せバ、これ一旦の怒ふ乗しく黒萩を拳しと短慮といへもあやまりなりしや。彼老淫婦を無礼なる所行を咎んとて、これ随さハ何わるん。婦人の性ハ僻て妬めり。それが為ふ打懲さともいろ

でる非義を改むべく骨髄に徹るやうぐ。これを怨ばらバ、ハせんされバいよ〳〵このゐまと標吉に告るとも渠ハ甥え養子え養母の非を非と做さバ渠只ハ愧くこれを遣らんりしらぶ是を非と做さバ不良のものと罵さん歟これも亦量りがたしかれバあながち標吉にハ告ざりしぞやもる事告させて嫌忌の家にあらんるのハいよく難かり。これとこの処を立去るとも亦遠りのあらにある孫ど。のふせん廣光井平が存亡定かならねども。又朝夷が在処をしらぬと今二の一僕両友ならで孰か吾侍を容るゝものあらんや進退更に究りぬことよる見惱まくけり。と百遍悔ひ千遍悔とも及ふせんすべハなかりけり果せるかな黒蔟が非義の怨ハ釋もし。又義邦を危くせり。その一條の物語ハ再入よ第三巻に解分るをまてしるらん。

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之二終

鷹斎先生著
名和對月書
新撰 普通 作文必用　中本 全二冊

右書ハ頭書作文類語數多ク揚ゲ本文ハ日用文ニテ皆々短文ニ綴リ小學兒童ノ作文一助書ナリ且ハ商家ニハ必ラズ便用ニ可相成珍書本也江湖諸君購求アランヿヲ知リ玉可シ何方ノ本屋ニモ有外御求被下候

書肆 文榮閣　大阪北久寶寺町四丁目十八番地　前川源七郎